

平成紙



おりおりの記

日本人起源論の魅力

公益財団法人 日本証券経済研究所
理事長

増井 喜一郎

最近、日本人はどこから来たのかというテーマについての書籍が相次いで刊行されている。私も全くの門外漢だが、人から薦められて目を通して見た。が、これがなかなか面白い。日本人の起源についてはこれまでも様々な議論があったが、最近の各地での重要な遺跡、人骨化石の発掘や、年代測定法、ゲノム解析等の技術の飛躍的な進歩により、次々と新たな仮説が提唱されるようになった。

たとえば、国立科学博物館の海部陽介氏によれば（あくまで私が理解した限りの話だが）、

- ①アフリカから出てユーラシア全体に一齐に拡散した人類（ホモサピエンス）は、ヒマラヤの北ルートと南ルートに分かれ、東アジアで再会した後、約3.8万年前に対馬ルートを通して日本にやってきた。
- ②その後、縄文期までに①の対馬ルートの人々のほか北海道ルート、沖縄ルートから列島に入った人々も加わり、相互に文化的影響を受けながら、必ずしも均一でない多様な縄文文化が形成された。
- ③弥生期に入り、大陸から水稻耕作等の文化を持つ渡来民がやってきて、縄文文化を継ぐ人々と大規模な混血が進んだ。

とのことである。しかし、まだ未解明な部分は数多く残っており、興味は尽きない。

いずれの国民にとってもそのルーツを探ることは、大変エキサイティングなことだと思う。ただ、

これらの著者が一致して指摘しているのは、自分達の集団の起源を考える上では自分達以外の集団の成り立ちを理解するのが重要だということだ。集団の形成過程で移動や混血、文化の伝播などが繰り返されており、純粋な民族や文化などは存在しないということに今さらながら気付かされる。



また、このテーマを考える上でのポイントは、世界的な視野をもって日本列島を見つめることと、人類学、考古学、分子人類学だけでなく幅広い学問の協力体制を整えて研究することだという。これは従来の日本の研究者はやや苦手としていたやり方とのことだ。グローバルな視野と総合的な戦略の必要性という意味では日本の経済、産業、企業が抱えている問題と同様のような。

日本人の起源を探ることは、子供の頃の夢を追うようなロマンと大胆かつ緻密な推理を兼ね備えた魅力あふれるテーマとして、今後も我々の好奇心をくすぐり続けるだろう。新たな発見、分析が続く、さらに進化した物語が語られるようになることを外野席の読者の一人として期待するのは欲が強すぎるだろうか。

日本人の起源を探ることは、子供の頃の夢を追うようなロマンと大胆かつ緻密な推理を兼ね備えた魅力あふれるテーマとして、今後も我々の好奇心をくすぐり続けるだろう。新たな発見、分析が続く、さらに進化した物語が語られるようになることを外野席の読者の一人として期待するのは欲が強すぎるだろうか。